



ハンス・ピーチ六段
を偲ぶ

2003年6月14日

ハンスピーチ六段を偲ぶ

弔辞（財団法人日本棋院 理事長利光松男）・・・ 03 ページ

息子ハンスの思い出（クフェタ&クラウスピーチ）・・・ 04 ページ

ハンスピーチ 入段までの主な歩み・・・・・・・・・・・・ 05 ページ

追悼メッセージ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 07 ページ

ブレーメン碁クラブの機関誌から・・・・・・・・・・・・ 23ページ

German Go Magazine 1994 年秋号特集記事から・・・・・・・・ 25ページ

思い出の一局（白：依田紀基 黒：ハンスピーチ）・・・ 31ページ

弔辞

財団法人日本棋院

理事長 利光松男

今回の事件には、世界中の囲碁に関わる者すべてが、大変なショックと深い悲しみを受けました。囲碁普及のために派遣中に起こった出来事であり、痛惜の極みでございます。

ハンス・ピーチ六段は、ご存知の通りヨーロッパ出身の初のプロ棋士として、囲碁の国際化の象徴的存在でした。手合いでの活躍はもとより、囲碁教室での指導、ヨーロッパでの後進の指導等、囲碁普及全般にわたり意欲的に取り組み、国内外での今後益々の活躍が期待されておりました。

ヨーロッパ以外での初めての指導と、張り切って旅立った先での、あまりに突然で理不尽な死には、言葉に尽くせぬほど無念で、悔しいかぎりでございます。

一日でも早く犯人がつかまればと願っておりますが、遠い国のことで、日本棋院が直接関ることが出来ないことに、腹立たしさを感じます。二度とこの様な事件が起きないことを強く願います。

今後益々の国際化が進む囲碁界において、ヨーロッパから日本への架け橋を掛けられたハンス・ピーチ六段の遺志を継ぎ、更なる普及と、囲碁を通じた人々の交流を深めることが、残された我々の使命であると、改めて痛切に感ずる次第です。

道半ばに旅立たれたハンス・ピーチさんのご冥福を心よりお祈り申し上げます。

息子ハンスの思い出

クフェタ & クラウス ピーチ

1968年9月27日の晩に、ハンスは生まれました。後にボヘミアで、彼のいとこが産まれるまで7年もの間、両家の唯一の孫で、家族みんなの大きな喜びでした。

彼の初めての長旅は生後6ヶ月の時です。チェコスロバキアの祖父母と二人のおばに会いに行きました。その後、毎年夏の夏休みの度に訪れ、ドイツ語とチェコ語のネイティブとして育ちました。

保育園はハンスにとって幸せな場所ではありませんでした。時に軽率な騒がしい子供たちは彼を不安にさせました。一人でレゴで遊んだり、仲の良い女の子と色々な新しいゲームに興じたりすることを好みました。5才で始めた鉱石のコレクションは、2年後には特筆すべきものになっていました。6才で小学校に入学して本が読めるようになると、すぐに読書に夢中になりました。子供向けの本だけでなく、鉱石について、自然や地球や宇宙の不思議について、または、マクラメ編みや、麦わら細工等のたくさんの趣味についての本を、むさぼるように読みました。それらの趣味は本から覚えたのですが、自分の部屋を、作業用の工房に変えてしまうほどの熱の入れようでした。それらの品々は、魅力的で実用的なプレゼントとして、家族や友人に贈られました。いくつかは今でも手元に残っており、彼を生き生きと思い出させます。また、6才でレコーダーのレッスンを受け始め、後に“ブレーメン ユース ウインズ オーケストラ”でクラリネット奏者として18才まで活動しました。音楽の他には、カヤックを始め、その後12才でハンブルグの知り合いから教わった囲碁に、多くのゲームの中でも、とりわけ夢中になりました。

以来、来る日も来る日も足を組んでベッドに腰掛け、手に入れた本で囲碁を勉強し、徐々に上達しました。すべて趣味が、彼の人生を豊かにし、世界を広げ、新しい友達をもたらしました。ドイツ国内外でのオーケストラ

活動、ヨーロッパの多くの河でのカヤックツアー、数え切れない程各地での囲碁トーナメント等です。手工芸、収集、カヤック、中世の城郭建築、囲碁、いずれであろうと、彼は自分の興味あるものに対しては、技術書を通じて学び、探求し、不断の努力で追及しました。多くのものを吸収することは、彼にとって難しいことではありませんでした。

ハンスは、1980年に初等教育を修了して、高校に進みました。学業は簡単にこなしたので、親として、勉強のことで彼を注意する必要はほとんどありませんでした。唯一、体育だけが、やや苦手な科目でした。1987年に、高校を1.3の平均成績(A)で卒業しました。地理と化学は優等です。当時、彼の前にはあらゆる大学への入学の道が開けていましたが、良心的兵役忌避者として、まず始めに、コミュニティーサービスに従事しなければなりませんでした。彼は、この期間に、大学で何を学ぶか決めようと思っていました。義務期間が終了し、勤務先の病院から、契約延長の申し出があったときには、喜んでこれを受けました。既に今後の進路を決定し、お金が必要だったためです。ブレーメンの大学の経済学と中国語のコースに出願し、夜間学校で中国語をコツコツと学び、収入を積み立てて中国旅行を計画していたのです。

しかし、1989年の春に、北京で天安門事件がおこったため、計画は断念せざるを得ませんでした。今やハンスは大人になっており、可能性を捜し求め、自分の道を自分で決めることを望みました。大学出願者300人の中でも、1位の成績でしたが、入学しようとはしませんでした。代わりに、貯金で古いメルセデスを買ひ、友達とスペインのシエラに旅行に消えてしまったのです。

私たちは、大学に行かないというハンスの決断に、かなり失望しました。しかし、ハンブルグに引越し、ついには東京に行ってしまう時にも、彼自身の選択に委ねました。私たちは、ハンスの人格と人間性を信じていたので、彼が必要とする時だけ手助けし、後は見守り続けました。

1990年のウィーンでのヨーロッパ碁コンGRESの後、彼はプロ棋士を目指すことを決意しました。



ハンス・ピーチ 入段までの主な歩み

1968年9月27日。父・クラウス、母・クフェタの長男として、ドイツ・ブレーメンに生まれる。1979年。ハンス11歳の頃、誕生日に叔父から囲碁セットをプレゼントしてもらったのが、囲碁との出会い。しかし、囲碁セットに付いてあったルールブックはルールが分かりにくく、しばらく放置せざるを得なかった。1981年。ハンス13歳の頃、ブレーメンの囲碁クラブにて碁を打ち始める。1986年。ドイツでは高校卒業時、徴兵、もしくはボランティア活動の選択が迫られるが、ハンスは後者を選択。病院にてボランティア活動を行う。囲碁の棋力はこの頃すでに、ヨーロッパのトッププレーヤーの一人になっていた。この年、ハンガリー・ブタペストで行われたヨーロッパ碁コンgresで小林千寿五段と出会う。この時の印象を小林五段はこう述懐する。「この時、見た碁が凄かつ

た。碁盤が4分の1しか使われてなくて、しかもすべての石が潰されて取られていて……」。1990年。オーストリア・ウィーンで行われたヨーロッパ碁コンgresで小林五段と再会。小林五段は、4年前のあまりにも強烈だったハンスの碁を鮮明に記憶していたという。1991年。この頃ハンスは、ヨーロッパで行われていた、いたる大会で上位入賞し名を馳せる。フランクフルトで行われた名人戦（第15期、小林光一名人 VS 大竹英雄九段）をハンス見学。その後東洋で本格的な碁の勉強をするために来日を決意。ちょうどこの時、日本棋院・幕張研修センターが設立されたため院生となる。1992年。寮生時代は、研修センターで行われていた二十五世本因坊治勲による研究会、林海峰九段の研究会に参加。小林覺九段など多くの棋士から指導を受ける。そして1997年。入段。



入段記念パーティーにて



入段後の成績

平成 9 年 2 勝 4 敗 0 分

平成 10 年 20 勝 12 敗 0 分け
二段昇段

平成 11 年 12 勝 13 敗 1 分け
三段へ昇段

平成 12 年 15 勝 12 敗 0 分け
四段へ昇段

平成 13 年 8 勝 13 敗 0 分け

平成 14 年 18 勝 16 敗 0 分け

平成 15 年 追贈六段
第 36 回棋道賞・国際賞受賞

生涯成績 75 勝 70 敗 1 分け

追悼メッセージ

師匠 **小林 覚**（日本棋院 棋士）

ハンス君と出会っておよそ13年、沢山の思い出が重なり辛い別れを経験しました。彼の碁に対する姿勢は、私達研究会仲間でも一番でした。碁を知ったからこそ、彼にも出会え、弟のように想ってきました。日本にきて碁の勉強を主に日々努力してた姿を見て少し休むことを勧めました。いつか振り返ったとき、悔いのない人生だったと言い切れる日々を過ごして欲しかった。ほんのつかの間でしたが、趣味や息抜きの場も見つけたようで、兄として、喜んでいたこの頃でした。でも彼は降り返る間もなく消えてしまった。だれも自分の未来は読めないけれど、34年を長いとは決して思えず、彼の面影は消えることなく、この先何度となく、この事実を忘れることはないでしょう。彼の思いの思い残しを背負い込むほど器の大きな人間ではありませんが、ハンスという存在を後世に残せたらと願っております。

高梨 **聖健**（日本棋院 棋士）

ピーチさんとは覚先生との研究会を通じて、三年程のお付き合いをさせて頂きました。誰に対しても優しく、常に同じ態度で接する姿勢にいつも尊敬の念を抱いていました。研究会の帰り道、久我山駅までの徒歩十分位の道のりを自転車の後ろに僕を乗せて坂道を軽快に下さっていくピーチさんが昨日のこのように思い出せます。今自分にできることはよくわからないのですが、ピーチさんは人の活躍を自分のこのように喜んで下さる方だったので、とにかく対局手合を頑張って、ピーチさんと過ごした日々を無駄にしないように頑張りたいと思っています。

孔 **令文**（日本棋院 棋士）

ピーチさんへの思いは、うまく言葉で表現できません。悲しみと悔しさで胸がいっぱいの時もありました。ただ、今の僕達（研究会メンバー）が仲間として出来ることは、前向きに生きて、一生懸命勉強に励むことだと思います。努力して実を結ぶことができれば、ピーチさんもきっと仲間として喜んでくれます。人にやさしく、情に厚い……。そんな人柄からピーチさんはたくさんの人達に愛されていて、このかけがえのない財産は永遠に残ると信じています。心からご冥福をお祈り致します。



黄 奕昀 （日本棋院 棋士）

ちょうど寮生（幕張研修センター）の時期が重なっていたんです、ピーチさんとは……。それ以来、お付き合いして頂いていました。院生時代、それぞれ出身国が違っていてもトラブルなど何もなくて、プロになれるかなれないかのプレッシャーの中、みんなで助け合っていました。今、一緒に寮で卓球していたのが懐かしく感じます。力強いスマッシュが飛んでくる……。当時、たくさん遊んでもらいました。まさかこんなことになるなんて夢にも思いませんでした。僕たちは棋士なんで、もっともっと碁を打っておけばよかった。院生時代、よく練習碁を打っていたことを思い出すと残念でなりません。

王 銘エン （日本棋院 棋士）

いい奴とは思っていたが、一緒に勉強するようになってから、僕達は仲間だった。勝ったときは皆で無邪気に喜び、負けたときは残念がった。いつか公なところで、君の碁がけなされた時は、自分のことにこのように腹を立てた。

この頃、君は盤の前では迷い、苦しんでいるように見えた。迷わない人なんていない、皆で一緒に迷いながら、愚痴を言い合いながら、自分の道を見つけていくのだと、そう思っていた。

君がいなくなったことをまだ理解することができないし、理解したくもない僕がいる。今日も碁盤の前で、皆で笑い合っただけで残念がり、愚痴を言い合うのだろう、君と一緒に。

剣持 丈 （日本棋院 棋士）

最初に知り合ったとき、まだハンスは院生で、一緒に王銘 の研究会で勉強していました。始めのうちは院生と棋士という立場上、彼は先生と呼んでいたのですが、そのうち彼も棋士になりそれでも、先生と呼ぶのがいつも気に入っていませんでした。その頃、毎日のように飲み歩いていた私は、いつも彼を飲み誘っていました。彼は仕事が忙しく一緒にのみに行く機会がなかなか作れなかったのですが、あるとき、行こうかな～なんて言うので、当時K九段やG八段も一緒に行っていたお姉ちゃんのいっばいいる店に突入しました。そこでも彼は私のことを先生！ 先生！ って呼ぶのでいつも気に入って事を酒の勢いもあって話す事にしました。

「ハンス、なんで先生って呼ぶんだよ。俺達は友達だろ、もうお互い立場も一緒になったんだから、名前で呼べよ！ 俺はハンスって呼び捨てにするからお前はジョーって呼ばないと俺は許さん！」

彼も最初はジョーと呼ぶのに抵抗があったみたいですけど、段々慣れて来て、「ジョーは太りすぎだから玄米食べ！」って研究会の時に持ってきてくれた事もありました。

このとき私は本当に嬉しかったです。

今回の事は非常に残念で仕方ありません。一人の友人を無くした悲しみは耐えがたいものがあります。しかし、肉体は朽ち果てても、彼の意思は我々の中に生きています。彼が普及や外人棋士として、やり遂げられなかった事を我々棋士はよく考え、理解し意志を受け継ぐ必要があると思います。

ハンスのご冥福をお祈りします。

小林 泉美 （日本棋院 棋士）

今回の事件、余りにも衝撃的で、ただショックを受け、悲しみに包まれています。このいわれようのない怒りを何処ぶつけたら良いのか、ただただ呆然とするばかりです。ピーチさんは私より年上ですが、院生時代が同期でクラスも同じ時期が多かったため、仲良くさせていただいておりました。私がピーチさんのご近所に引っ越してからは、時間のある時に家で早碁を打ったりしていっしょに勉強させて頂いていました。だいたい、打つときは早朝に私が電話して、ピーチさんに起きていただいて午前中に打つような形が多かったと思います。お互い仕事や研究会などもあり、忙しいので、その合間をぬって早朝一緒に勉強して下さるピーチさんにはとても感謝していましたし、明るくて、社交的なピーチさんのお人柄にはいつも和ませていただいております。今回、このような現実を突きつけられるとは……。本当に残念です。どうか、囲碁界の仲間たちを見守っていただけたらと願ってやみません。心よりご冥福をお祈り申し上げます。



小林覚九段と

Sorin Gherman （日本棋院 元院生）

ありがとう、ハンス！

私とハンスは、ともに小林千寿先生の生徒として日本で暮らしていました。ハンスは私よりずっと前に院生になっていて、私が来日したときにはAクラスに在籍していました。私の日本棋院の院生生活（1994年1月～1995年9月）中の1年半、ハンスは日本語でいう「先輩」だったわけです。ハンスは成田に出迎えてくれ、私が生活することになった囲碁研修センターまで送ってもらいました。またあちこちを案内してくれたり、碁、日本語、日本の文化を教えてくださいました。そして日本ではほとんど見かけないハンスは東京で暮らしていましたが、週に一度は院生公式手合いのために囲碁研修センターに来ていました。私に会うと必ず、私の対局を検討してくれたり、また指導碁を打ってもらいました。ドイツのお菓子を彼の実家から持ってきてくれて、私に食べさせてくれたのも良い思い出です。

彼の碁はまさに彼を体現するようなものだったと思っています。とても実直な手筋で、手厚く、そして力強いものでした。彼は曖昧な手や嵌め手を打たず、常に自然で率直な手を打っていました。彼は武宮先生や小林覚先生の棋譜を並べるのが好きでした。ハンスは囲碁に対してとにかく真剣でした。彼のあらゆる行動が囲碁のためにあるような感じでした。院生生活が続くにつれ、彼にとってはプロ棋士になることが最大の目標となりました。しかしただ自分だけのためではなく、私や、千寿先生の生徒たちに碁を教える時間も多く取ってくれました。彼は習慣に従っていただけではなく、囲碁というものをとにかく大事にしていたのだと思います。彼の物惜しみしない、大きな心がそのような振る舞いに結びついたのだと思っています。

彼は、囲碁がほとんど、ないし全く普及していない国に、囲碁を広げたいのだと熱心に語っていました。彼が、まさにそのような普及活動の最中にあのような出来事が起こったのは全く不幸なことだと思います。

彼の熱意と、私たちに教えてくれたこと、あるいは彼の戦った碁を通じて、私たちの中に存在し続けるでしょう。彼は「先輩」であるだけでなく、私の在日期間を通して「兄」でもある人でした。ありがとう、ハンス

Benjamin Teuber (弟弟子)

ハンスは、私と行動をともにする間、常に私の先生でした。富士山近辺を歩き回りながら、妙ちきりんなドイツ語の歌と一緒に歌ったことをよく思い出します。ハンスは自在に世界中を旅して回る船乗りが好きでした。彼の内面にも、どこか船乗りの一面があったのではないかと考えています。それで彼は日本という、故国から遠く離れた国で生活することになったんでしょう。そしてまた、旅や自然、水が大好き(カヤックをしたり、泳いだりすることが大好きでした)だったのでしょ。

ハンスは、死に際も船乗りのようでした。故郷からも日本からも遠く離れ、家族も友達も側になく、でもエキゾチックで興味深い国において、朝日に輝く大きな湖の風景を目にして死んでいきました。

ハンス、あなたが私にしてくれたことを決して忘れません。あなたの魂の安らかならんことを祈っています。

Csaba Mero (日本棋院 元院生)

ハンスは私の先輩で、二年半の間、私の隣に住んでいました。ハンスは異国で暮らす私をいつも助けてくれ、その二年半の間は毎日のように顔を合わせていました。ハンスの訃報に触れて、兄を失ったような気持ちになっています。

私が最期にハンスに会ったのは、彼が最期の旅に出ようとするときでした。彼は旅行が大好きでした。南米なんて素晴らしい場所を訪問できるのは羨ましいと言うと、彼は笑っていました。

彼は幸せの中で死んでいったのだと思います。私は生涯彼を忘れません。



ブレーメンの自宅にて



弟弟子たちと

「友達」ステファン・ブディック

「囲碁が私達をめぐりあわせた。囲碁は君にとって人生そのものだった。私にとっては大切な宝物だ。君は私の最愛の囲碁友達だった。例え何千キロ離れていようとも、私は君を友人として敬愛した。君は永遠に私の友人であり続けるだろう。もし君と、君が愛した人たちのためにできることがあれば、私は喜んで何でもしよう！

私達はまた再び出会えると信じている。私は今でも君のことを思っている。そして、共に過ごした時間が私の記憶の中でよみがえる。本当に楽しかった！2人で話したことも、碁を打ったことも、山を歩いたことも、仕事も、旅行も、一緒にいたすべての時間が。君がいなくてとても悲しい!!!」

あの忌まわしき事件のニュースを聞いたあとすぐに、私はこの最初の数行を書いた。

数年前、中山典之先生に、「囲碁について一番好きなことは何か」と尋ねたら、彼は、「世界中で多くの友人を得たこと」と答えた。そして、こう答えたのは彼だけではなかった。ハンス、君もきっとそう答えていただろう。

囲碁の世界における君の成功と功績をここで挙げるつもりはない。君の囲碁の実力と友人の数がそれを物語っている。ドイツ囲碁協会も君の生涯についての記事を出すであろう。しかし私達にとって、君がどのような人物であったか理解することが大切だ。

私にとって驚きだったのは、普段あまり君との付き合いがなかった人たちが、君の死についてもっと詳しく知りたい、と私に尋ねてきたことだ。彼らは、君がどんなに素晴らしい人物であったかということ、私に伝えたかったのだ。

私達は皆、君の心の広さ、友情、優しさ、慎み深さが好きだった。君は決して大声を出して怒ったりしなかった。君は穏やかで寛大な人だった（盤上で相手の石を殺さなければならない場合を除いては。でも、そういう時でさえも、君は相手に対してすまない気持ちになっていただろう）。

君はいつでも、持っている知識を人々と分かち合い、また、生徒達を傷つけないよう気遣っていた。囲碁は君の人生だったが、君が囲碁に支配されたのではなく、また君が囲碁に熱狂的になったわけでもなかった。君は最後まで優しくかった。

そして今、君の素敵な笑顔を思い浮かべている。囲碁の世界にとって償いきれない損失だ。君は私達にとっては看板スターであり、人気者であり、また、囲碁に関してアジアとの架け橋だった。君はどんな質問にも答えてくれたし、できることは何でもしてくれた。

親愛なるハンス、君を良く知る私達にとって、君の死はとても理解できないことだ。その知らせを聞いた時、ほとんどの人がそのことを信じられなかった。そして信じたくなかった。これは、私達の誰もが夢にも思わなかったことなのだ。そう、君は冒険家で、天秤座生まれの向こう見ずな一面を持っていたのだろう。

私は東京の街を何度か君と自転車で一緒に走ったことがあった。君には独自の交通ルールみたいなものがあって、かなり危ない所もうまく走り抜けていた。険しい山に1人で登ったこともあった。君は自分自身を限界まで追い込もうとすることを好んでいた。そして君と一緒に案内をしてくれる人たちに全幅の信頼を置いていた。しかし、誰も思いもよらない形で終わりを迎えることになってしまった。

もし、君が死んだとしか聞かされていなかったら、交通事故か、山での事故を想像していただろう。だが事実は、悪い冗談と言うには程遠いものだ。こんなことは西部劇の中でしか起こり得ない。確率は1万分の1、あるいは10万分の1だろうか。本当にあり得ないことだ。だが不運にもそれは君に起こってしまった。

誰でも、不幸な死に直面したときは、そこで生き延びるか、少なくとも最悪の事態からは救われるものだ。しかし君にはその幸運はなかった。

なぜ君が？君の家族や近しい友人達はきっと問いかけるであろう。しかし、納得のいく答えはないのだ。

ある人々は、いつの日か君は生まれ変わると信じているかもしれない。それは君が信じていたことでもあるが。しかしそのことは、私達にとって救いとなるのだろうか。もう二度とこの世で君と一緒に時を過ごすことはできない。一緒に年を取ることも、冗談を言って笑うことも、暮を打つことも、話すことも、歩くことも、ほかに何もすることはできない。お茶を飲みながら、椅子に座り、白髪頭でうなずきながら、君との思い出話をしたかった。それが永遠に夢のままで終わることはとても悲しい。

ハンス、君はあまりに若くして逝ってしまった。何故なのか、それは誰にも分からない。

それは誰にでも、どんな時にも起こり得ることだ。宇宙の法則によって何が起こるのか、私達にはわからない。ゆえに、人間にとって死が何を意味するのか、判断することはできない。私達にわかることは、愛するものが突然旅立った時、その死が私達に何をもたらすのかということだ。後に残された者たちにとって、それはどんな時でも悲しいことだ。

やがて私は、一緒に過ごした楽しい時や憂鬱な時のことを思い出さだろう。しかし今は、2人で分かち合った過去だけが残されている。そのことを考えると悲しくなるだけだ。君と共に歩むはずの未来はもうないのだ。

君に最後の別れを告げるために、私達は集まった。そして、君が私達と共にここに存在し、皆が集まっている所を見て感謝してくれていることを心から願っている。

君は「魂の再生」に関心を持っていたから、本当は死など恐れていなかったのだろう。むしろ、自己の意識がより高いレベルへ成長するための過程として死を捉えていたのだろう。

私達もその理論を知っている。そして私達が驚いたことに、仏教では「再生」を自明なこととして捉えている。君も再生の道を歩んでいると考えたい。

しかし、私達はこの世に存在している。君はいない。それが問題なのだ。私達は愛するものを失った。もし君が、新たな存在として戻ってきたとしても、私達には何の意味があるのだろうか。それはもはや私達のハンス・ピーチではない。君自身ではないのだ。

インディアンは、死者のために祝祭を催す。人は、死によって地上に存在することの苦しみから解き放たれ、天国へ行くことができるのである。

親愛なる友よ、天国こそが君が存在するのにふさわしい場所だ。君にはたくさんの素晴らしい才能があり、君が存在すべき場所は他には見当たらないのだ。多くの人々が君を讃え、尊敬し、そして君を愛した。君の思い出はこれからずっと私達とともにある。君が元気であることと、いつの日か再会できることを願って、杯をあげたいと思う。

最後に、「Die Mitte des Himmels」(「天元」)という本の中から、「二人の友達」という物語を紹介したい。そしてその後、黙祷を捧げよう。

「二人の友達」

465年、中国が南北2つの王朝に分かれていたころ、Zhu Dao-zhen と Liu-Kuo という2人の仲の良い友達がいた。彼らは毎日2人で暮を打っていた。8年後、Dao-zhen が突然この世を去った。

それから数ヵ月たったある日、Liu-Kuo が書斎で本を読んでいた。

すると、ドアをノックする音がして、一通の手紙が届いた。その手紙は明らかに Dao-zhen が書いたものだった。Liu が手紙を開けると、そこにはこう書かれていた。

「ここは君がいなくてとても辛いよ。僕は今、人間が最後にどこへ行くのかがわかった。暮盤を用意して、君を待っているよ。」

手紙を読み終わると、Liu は目を閉じ、再び暮を打つために友人のもとへと旅立った。

さようなら、ハンス！

ステファン・ブディック - ハンブルグ、2003年1月22日

Troy Anderson (日本棋院 元院生)

ハンスさんの死に際し、謹んでお悔やみを申し上げます。私は1990年から1991年まで約1年間、千葉の日本棋院囲碁研修センターでハンスさんと共に過ごしました。彼は私にとってすばらしい友人であり、また、囲碁のプロ棋士になるための研修の間、喜びも悲しみも分かち合った同志でもありました。

彼との思い出の中で、私は彼が家から送られてくる手紙や荷物を開ける時の表情が好きでした。それが蜂蜜でもお菓子でも、あるいはドイツからの便りだけであっても、彼は微笑んでいました。対局の時や寮の管理の下でどんなに辛いことがあっても、彼は笑顔を見せていました。彼は家族の皆さんから受ける温かさをいつも私達と分かち合いました。私は、皆さんの心遣いが当時彼にとって大変意義のあるものだったことを知っていただけなのです。彼が世界中のどこにいても、それは確かなことだと思えます。もう一つ、私の心に深く刻まれている思い出は、研修センターで出される色々な食べ物について、冗談を言い合ったことです。食べ物は...かなり独特なものでした。ある日魚の卵のようなものが出てきたかと思えば、次の日にはタコの脳みそのようなものが出てきました。いったい自分達が何を食べているのかと不思議に思うこともしばしばありました。そういう食べ物を見ると彼は、さあ、食べてみようよ、という口調で「ママが昔よく作ってくれた食べ物みたい」と言ったものでした。その後私達の間で繰り返し冗談として言うようになりました。この言葉を聞くといつも、私は彼のことを思い出します。

私の日本滞在中、彼が私に与えた影響は計り知れません。彼はすばらしい友人でした。そして愛する家族の一員でした。私は皆さんの悲しみを想像することはできません。しかし、皆さんが彼の死と戦っているように、私の思いと祈りは皆さんとともにあります。彼の強い意志と力が皆さんとともに存在していることを強く信じています。

謹んで哀悼の意を表します。

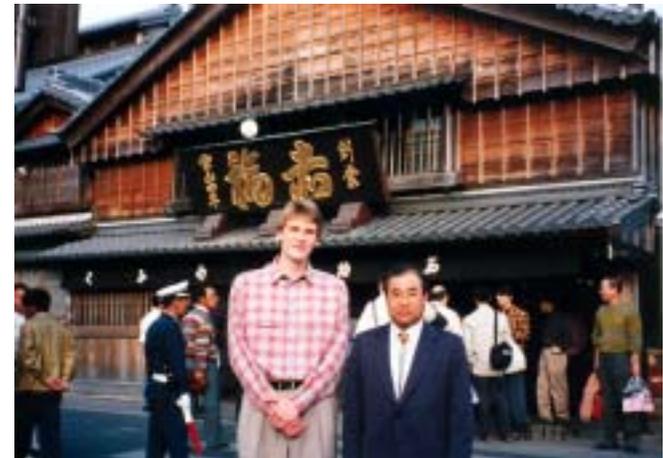
白川 雄一郎 (日本棋院 院生)

自転車の好きな少しおちゃめな気さくな人でした。

塚本 清士郎 (数寄屋橋囲碁倶楽部)

ハンスさんとの出会いは、ハンスさんが院生をしていた頃、私が小林千寿先生の指導碁を受けていた時でした。とても綺麗な日本語を話す素直なドイツ人青年との印象を受けました。その後何度となく指導碁を受ける機会を得ましたが、その指導振りは、大変に懇切丁寧な指導でした。又、私達が自分の意見を述べている間は、黙って聞き、話が終わってから、一つ一つ解説、指導をして下さいました。

これから囲碁の世界普及を目指すに当たり大いに活躍が期待される、又欧州に於ける欧州人としての最高指導責任者になったであろうハンス先生の逝去は悔やんでも悔やみ切れません。残念です。今はハンス先生のご冥福を心より御祈り申し上げます。 合掌



阿佐 巧（小林覚九段 研究会）

ピーチさんにお会いしてから四年近く経ちますが、たくさんの良い思い出が頭の中に蘇えり、もうお会いできなくなってしまったことが今でも信じられません。誰に対しても優しくいつも素敵な笑顔を絶やさぬピーチさんの姿はいつも、皆の心を和ませてくれました。

自分の中で、ピーチさんとの一番の思い出はやはり頭を坊主にしてもらったことです。あの容赦のないバリカンの音は今でも忘れることができません。あの時は少しピーチさんのことを、実は怖い人なのではないかと疑ってしまいました。でも、あれから、何事にも恐れぬ強い精神力が身につく、今では、あんな素晴らしいことをしていただいたということに感謝の気持ちで一杯です。

碁の普及もさることながら、自分の対局の時の真剣な眼差しは本当に見習うべきものでした。ただまだまだ未熟な僕と練習碁を打っていただいた時に、熱くなっている姿はピーチさんでもこんなことがある人だなあと、少し安心させられました。

これからも天国で、その優しさをたくさんの人に分け与えて下さい。今まで本当にありがとうございました。

魚返 真史（日本棋院 院生 中学1年生）

ピーチ先生には千寿会で何回か教えてもらいました。もっと教えてもらいたかった。ピーチ先生、「ひまな時は電話してね」って電話番号を書いた紙をくれたから、冬休みに電話したんだよ。でも留守だった。1週間後、ロンドンにいるお父さんから電話がきて「ピーチ先生亡くなったって」って言われた時、すごくショックだった。ピーチ先生が囲碁を世界に広めていたから、今度はぼくが世界の色々な人と囲碁をやって仲良くなりたいです。

大塚 日正（法華宗 大本山「鷲山寺」 第九十九世貫首 大僧正）

「では行ってきます！」「気をつけてね！二十七日、楽しみにしていますよ……」今でも手帳には、一月二十七日に指導碁の予約が消さぬまま記されている。其れは平成十五年の正月を迎えて初めての打ち初めの日であった。対局後、出したお雑煮を「美味しい」と言い、お代わりしながらの会話であった。

それが最後の会話になろうとは……。

ハンスさんはプロになる前、小林千寿先生に紹介頂いてから十年、月二、三回自宅に来て頂いての指導碁だった。

彼との付き合いは、碁だけではなかった。外国からの院生の少年達と山中湖の山小屋でバーベキュー。富士登山。サイクリング等々。様々な思い出が、今走馬灯の様に私の脳裡を駆け巡っている。

それにしても、あまりにも惜しい不慮の死であった。心からご冥福をお祈りする次第である。 京都にて



永山 智久 (子ども囲碁教室 小学5年生)

「ええっ！ まさか！ うそだろう!？」

僕は自分の目を疑った。でも、たしかに新聞にはハンス先生が亡くなられてしまったと書いてあった。何かのまちがいだと信じたかった。その日、たった一枚の新聞紙が僕にとてつもない衝撃をあたえた。

本当にハンス先生はやさしくて、強くいい先生だった。どんな時でも僕たちにやさしく接して下さり見守ってくれた。その先生ともう会えないなんて……。僕は囲碁を通じてハンス先生と知り合い、いろいろな事を教えてもらっているうちに、もっと囲碁も英語もうまくなりたいと思っていたところだった。ハンス先生、天国で安らかにお眠りください。



幼稚園にて
子どもたちと



山本 茂正 (柴又囲碁サロン)

平成十三年の一月、映画「男はつらいよ」で有名になった葛飾柴又の帝釈天近くの囲碁サロンではじめて会ったピーチさんは、背が高くてまるでガリバーのような印象を受けた。髪は長くして後で結んでいた。そのガリバーさんに、外人特有の流暢な日本語と豊かな感情表現とで、懇切な指導碁の解説を受けた。碁を打ちはじめで三十余年、まさか青い目の外人さんに碁を教わるなど夢にも思わなかった私は、ピーチさんの明朗な優しさとマナーの良さに感動してしまった。

「ピーチさんは日本語も巧いし、碁も強い。天才ですね」と私が声をかけると「イエエ、テンサイデワアリマセン。ドリヨクデスネ」と、おどけながら答えたピーチさんの柔和な顔が今も思い浮かぶ。

一年程過ぎた頃ピーチさんに「今度みんなで一杯やりにいきましょう」と提案すると、即座に「イキマショウ」と顔をほころばせた。杉並区で一人暮らしをしていたピーチさんは、普段はプロ棋士として厳しい勝負と孤独の中に身を置いていたのか、我々のような気の置けない仲間と飲むことを喜びとしていたのかも知れない。

しかし、なぜか実現できなかった。まさに後悔先に立たずで、今もそのことが心にかかっている。私はピーチさんの死の報を知ってすぐにピーチさんのアパートにかけつけて、ベランダに吊ってあった大きなハンモックを長い間見つめていた。さようならピーチさん。

鎌田 親貞 (ホテルニューオータニ囲碁サロン)

その発祥の地はインドとも中国とも云われる囲碁が生まれて以来 4000 年の時が流れた。本邦へは 1500 年前に伝来したという。いったい幾人の人を介し幾山河を越えたことであろうか。伝播に伝播を重ねた囲碁は、ドイツ北西部の緑豊かな町ブレーメンの一人の若者の心を虜にした。

欧州での囲碁普及に力を尽くされている小林千寿師との出会いをえにしとし囲碁を極めたい一心で遙か極東の島国に来日したのは 21 才の時と聞く。研鑽を積んだに違いない。1997 年にプロ棋士としての入段を果たしたこの若者の春秋は誠に豊かであったはずである。

しかるにその彼が中央アメリカでの囲碁伝導の旅の最中、暴漢に襲われて死したと。

その地はあの心優しきマヤ文明が栄えしグアテマラなりと。何故か。スペイン人に滅ぼされたが、故に彼の地の人の心は荒んでしまったのか。貧困が故か。

いずれにせよあまりに理不尽な突然の死に言葉もない。囲碁への殉死とでも云うのか。

4000 年の囲碁史の一頁というにはあまりに無念な死である。

この若者が生きた証はここ日本に鮮やかに刻み込まれているだけは間違いない。この若者の名はハンス・ピーチという。唯々彼の冥福を祈るのみである。合掌。



大竹 博明 (日本歯科大学客員教授)

1月17日午前中、ハンス・ピーチ青年がグアテマラで凶漢に射殺されたという報を受けて、愕然としました。今回、中米へ囲碁普及の棋士に選ばれ、喜んで出発したのがほんの数日前であったからです。思えば、20 年前小林千寿先生がヨーロッパから碁を習いに来ていた子供達を母親のように数人連れて、歯の治療や口腔検診にこられていたものですが、その中に凜々しいハンス・ピーチ少年がいたのです。

その後の身長と碁の成長ぶりを目のあたりにしてきましたが、棋士になったある時、やはり千寿先生の弟子とルーマニアとドイツの少年とハンス先生の 3 人と共に、伊豆下田へ同行することがありました。裸電球 1 つの温泉の露天風呂にはしゃぎ 2 時間程出てこなかったことや、弓ヶ浜の砂浜を端から端まで駆け回り、最後にこの砂浜の上で碁を打とうと言い出した時には、何と自然と碁の好きな人達なんだと感動しました。確かに、碁盤は宇宙に譬えられる様に、碁と自然とは共通したものであるのでしょうか。

将来はヨーロッパの碁の普及にあたりたいと熱意を燃やしていたハンス・ピーチ青年を失ったことは、日本のみならず世界の囲碁界において、尊い人を失ったと残念でなりません。

心からご冥福をお祈り致します。

相澤 宏夫 （ホテルニューオータニ囲碁サロン）

車窓に写る若葉が鮮やかに輝き乍らうしろに流れていく。ふと後ろの車輛のドアに背をもたれた外人の青年のどこか淋しげなうれいを帯びた顔が写しだされた。五、六年前の新緑の御嶽に仲間と遊びに行った時の事である。

「アレ！ ハンス君かな？」と思い乍ら沢井駅に到着した。ホームに降り立ったとたん「相澤さん」と声をかけられ、振り向くと人懐こいニコニコ笑ってるハンス君の顔がとびこんできた。指導碁を親切にうってくれたハンス君。パーティーで美味しそうに鮎をほうばっていたハンス君。今この世にいないハンス君。でも彼を思い出すのは奥多摩で会った遠い故郷をおもいだしていたのだろうか、どこか淋しげな彼の顔が忘れられない。安らかに。

鷹西 美佳 （日本テレビ アナウンサー）

市ヶ谷の五番町交差点すぐ近くに 自然食品を扱う「ヘルシー館」というレストランがある。野菜が多くて身体に良さそうなランチが人気で、外国人のお客さんも多い。ハンスさんも鼻息にしていたようで、去年の秋頃だったか、私がか社の同僚と食事をしていたら 一人でお店に入って来た。水曜日だったので 対局中だったのだろう。その時は挨拶を交わしただけだったが、なんとなく手持ち無沙汰でこちらを眺めていたハンスさんともう少し話をしてあげれば良かった！ と後悔したのは訃報を聞いた瞬間だった。

次に会ったら、「この前はゴメンナサイね...」と言おうと思っていたのに、二度と会えなくなるなんて...。人生「一寸先は闇」というものの、いまだに信じられない気持ちでいる。

高橋 一祐 （東京歯科大学名誉教授）

「今回はドイツからきている若手棋士はどうでしょう」囲碁仲間の日本歯科大学大竹博明教授がご存知と云うことで審歯会（列記とした日本棋院の支部、保険審査に係る歯科医師五十名が会員）の指導碁をお願いしたのがハンス・ピーチ六段との出会いであった。これが縁となって今度はニューオータニの囲碁クラブで何回となく指導碁を打って戴く機会に恵まれた。筋悪るを自認している私の場合、例え指導碁といえども相手の石を捕獲することを秘かな目標にしている。その点ハンス六段の碁はソフトで何となく白石が取れそうに思えた。しかし結果は何時の間にか黒石が壊滅していた。並べ直しの場面では、ここに打てば大勝。これで白はつぶれ。と実に丁寧で人柄が優しく、また指導碁をお願いしたくなる素敵なお雰囲気があった。不慮の事故は痛惜の極みで心からご冥福をお祈りいたします。

大谷 裕子 （日本YPO 三の会）

七年程前でしょうか。あるパーティーで、千寿先生からハンス先生を紹介されました。初の欧州出身のプロ棋士としてですが、その頃、全く囲碁に興味もなく、やがて始めることも予想だにできなかった私は、在り来たりの質問をただけでした。それから数年後、私の囲碁教師として再会。習い始めて一年間に、後ろに結んだロングヘアから坊主にと極端に変わるヘアスタイルに驚かされたりしました。忘年会などでは、食欲旺盛。どんな場所にもズボンの裾を靴下にはさみ込み、自転車こいでダッシュで現れる少年の様な人でした。「上手になりましたね。」そんな言葉をもっと掛けて欲しかったのに残念です。感謝の気持ちを込め、ご冥福をお祈りします。

藤田 和男 (千寿会)

ハンス先生が、小林千寿先生と柏市囲碁の集いの会に見えたのは7年前の平成8年2月11日でした。当時まだ院生でしたが、毎年この時期、千寿先生とこの会に参加し指導碁をお願いしてきました。

この会は柏市に千寿先生を迎えて囲碁大会・指導碁・お話と1日行事ですが、平成7年から今年で9回を数え、3年前からは小林健二先生も加わり、今は150人前後の会になりました。これも、千寿先生の人気もさる事ながら、ハンス先生の朴訥でまじめな人柄が結構評判良く、ファンになる人が多く、主催者としても大変嬉しい事でした。大盤解説で千寿先生と一緒に解説も、あの特徴ある話し方が未だに懐かしく思い出されます。

ハンス先生、この会を天国で見守ってください。御冥福を祈ります。



千寿会にて

原田 昌孝 (千寿会)

私がハンス・ピーチさんに初めて会ったのは7年ほど前、小林千寿先生の千寿会に入会したときでした。まだ日本棋院の院生でした。早くプロとして認められるようにと応援していました。

千寿会は海外の(とくにヨーロッパの)若者たちに囲碁普及の援助をすることを大きな目的として発足した会のようで、ハンス・ピーチさんはヨーロッパの若者たちの先頭バッターとして活躍を期待されていたのでした。ハンスさん自身も囲碁普及に力を入れていた様子で、ヨーロッパでの普及活動に何かと工夫をしていたようです。ハンス・ピーチさんの夢を引き継いでくれる若者が早く現れることを希望しつつ、ハンスさんのご冥福を祈っています。

岡本 隆之 (千寿会)

押入れを探したら、まだ残っていた。2001年9月10日の週刊碁。新聞手合成績の欄。8月27日、富士通杯一次予選ハンス・ピーチ四段・両不戦敗・渋沢真知子初段。いったい何があったのか？両者反則でもあったのかと思いました。次の千寿会、ピーチさんは頭に切り傷を一杯つけて、丸坊主になって現れました。聞けば、単なる寝坊で、反省して自ら頭を丸めたとのこと。でも、丸坊主にしたピーチさんも結構格好良かったですよ。千寿先生は嫌いだそうですが。ある日、職場にピーチさんから電話が掛かって来た。K氏の電話番号を教えてくださいという。後で、K氏に聞けば、ピーチさんに女性を紹介していて、一度会ってみるとい話になっていた。ところが、どうも、直前になって怖気づいたらしい。

小川 浄三 (囲碁サロン「ホワイエ」)

小林千寿先生のご紹介により国分寺の囲碁サロン「ホワイエ」で初めてお会いし、ご指導頂いたのが4年前でした。以来10回ほどいただいたでしょう。毎局親切丁寧に手直しをしてくださりました。

一緒に食事に行った時は、上手にはしを使い寿司をうまそうに召上っていました。流暢に日本語を話され「日本の棋士になり切っているな」と、親しみをおぼえたものでした。

国際的な囲碁普及出張中に暴漢の凶弾に倒れられたハンス・ピーチ先生！ ご活躍もこれからという時、さぞかし無念でしたでしょう。「ホワイエ」のレギュラー指導棋士だった先生の悲報は、我々会員は大ショックでした。先生のあの笑顔が見られないのは残念でなりません。

どうぞ安らかに眠り下さい。

谷岸 隆行 (数寄屋橋囲碁倶楽部)

一月十七日の朝、会社に出勤してハンスさんの訃報を知りました。

ハンスさんが現地へ出発の当日、囲碁倶楽部で小林千寿先生に碁の指導を受けておりました。空港から先生宛に電話が入り、先生が「元気で行ってらっしゃい」と激励されているのを聞いていただけで私には信じられない思いでした。

何故、遥々ドイツから日本へ囲碁を研鑽に来て、更に遠くグアテマラで事故に遭わなければならないのか、人生は無常とはいえ不条理で納得できない気持ちで一杯です。

初心者の私は、ハンスさんに親切に碁の指導をして頂きました。ハンスさんの含羞んだような笑顔は忘れることができません。

ハンスさんの囲碁に対する情熱が今回中米に向かわせた事を思い、謹んで故人のご冥福をお祈り申し上げます。

太田 万三彦 (日本YPO 三の会)

ハンスさんに初めて会ったのは8年くらい前だろうか。家族で囲碁を習いたくて毎週自宅に来て貰うようになってからだ。小林千寿先生に紹介頂いたのだが正直なところなんで囲碁を教わるのに外人でそれもドイツ人なんだ？って感じだった。その上すごく背がでかいし。しかし毎週我が家で一緒に食事をするうちに妙に慣れてしまい、やっぱりドイツは同盟国だ！などと訳のわからない事まで考えた。その後私も趣味がこうじて我が家の一階に碁会所を作ってしまう、彼にはそこでお客さん相手に毎週指導碁を打って貰うことになった。私と彼の囲碁では特別なルールを作った。それは終局して10目以上の差があったらハンスピーチの負けというルールだ。逆に9目以内だと私の負けになるので互い慎重に地合いを読まなければならずこちらが変な手を打つと「オオタさ～んそんな手はみたことありませ～ん」とやっと上手くなった日本語で文句をつけられた。もっとも私の打つ手は殆どへんなので彼は「みたことありませ～ん」の連発になってしまった。どんなに指導しても上手くならない弟子を持った彼の気持ちは解らなかったが、少なくとも私はたのしかった。もう一度彼と私だけの特殊ルールで碁を打ちたい。

私の家族と一緒に釣りに行った時、小さなメバルを釣って子供のようによるこんでいた彼、荻窪の住まいから柴又の私の碁会所まで自転車で来てふ～ふ～息を切らしていた彼、今思うと彼は我々がなかなか出来ない自由な生き方をし一方では石にかじりついてでもプロ棋士になるという頑固さと情熱を持った人生を送っていたのではないかと思う。後悔の無い生き方だと思った。

前田 博明 (ハッピーマンデー 囲碁教室)

「ええっ」という私の絶叫に周囲の人が驚いた。「何か仕事上のトラブルですか？」そう聞かれたが首を振ることしかできなかった。棋院のウェブでピーチ先生の死を知った瞬間のこと。

強盗に襲われて亡くなったと報じられている。「身近にそんなドラマみたいなことが起こるわけがないじゃないか」。そんなふうを感じながら、あちこち情報を見て回る。いずれもピーチ先生の死を伝えている。

先生は、私たちが通う「ハッピー・マンデー囲碁入門教室」(以下、ハッピー・マンデー)の人気講師。私にとって初めて身近に見る「プロ棋士」だったし、多くの生徒にとってもそうだった。

ハッピー・マンデーは15級くらいの初心者を中心とする教室。でもピーチ先生人気もあって、一年以上この教室に通い続ける生徒もいた。碁会所では一桁級で打てるような生徒も在籍する。ピーチ先生はときに、

ハッピー・マンデーにて



欧州アマチュア棋士を連れてきてくれて、生徒たちは「国際交流」を身近に感じることもできた。

「ピーチ先生が亡くなりました」。そんなメールをハッピー・マンデーの生徒たちに出した。「私はこれから棋院に行ってみます」という返事も何通か来た。メールを受け取り、そのメールに返信しつつ、「もう碁はやめよう」なんて考えていた。

そんなときまたメールが届いた。「前田さん、私たちは囲碁を一生続けていきましょうね」。中年男として恥ずかしい限りだが、涙が出た。囲碁普及に熱心だったピーチ先生。その先生の教えを受けていながら、碁をやめようとするなんて失礼な話だなと思った。

IT会社を経営する私は、「ハンス・ピーチ先生の名を残そう」というオンライン版の署名活動を始めた。あっという間に署名が集まった。もちろん教室でも署名をお願いし、さらに多くの署名を集めることができた。この活動を通じ、数多くの碁打ちと知り合い、そして今回の「偲ぶ会」を多少なりともお手伝いする機会を得た。

ピーチ先生。ハッピー・マンデーは今、あなたの弟・弟子である孔令文先生が引き継いでくれています。あなたを知る生徒も、直接には知らない生徒も、碁をすごく楽しんでいます。何人かの生徒は卒業して行きましたが、「偲ぶ会には行きますよ！」と元気なメールをくれたりします。私はなかなか強くはなりませんが、「シショー」なんて慕ってくれる生徒に囲まれています。

あなたがいなければ私はいません。私がいなければ、私を「シショー」と慕う子たちの囲碁生活も変わっていたことでしょう。あなたの功績を伝え、そして奥の深い、最高に面白い碁を打ち続けて行きたいと思います。いつか私の「デシ」たちとも対局してあげてください。

山下 洋輔 (ジャズピアニスト)

前回ハンスさんのご両親が来日された時に、小林千寿先生、鷹西美佳さんともども昼食をご一緒しました。ハンスさんの様子を聞かれて「音楽の分かる優しい人でした。よくコンサートにも来てくれました」とお伝えしました。最後にお目にかかった時のこともお話ししました。日本棋院の一般対局室で私と碁敵がやっているところに、教室をやっていたハンスさんが来てくれて、色々アドバイスをしてくれたのです。その時に書いてくれたEメールアドレスの紙をお見せしました。自分の名前をカタカナで書いてあるその紙を見て、ご両親は、少し涙ぐまれていたようでした。その紙を今でも持って私は旅をしています。NYでのレコーディングの時に急に「レクイエム」のような曲ができましたが、もしかしたらハンスさんのリクエストだったのかもしれませんが。ご冥福をお祈りします。

佐藤 健一 (木工作家)

ある雨の夜のことであった。ハンスの部屋でハンス、エミ、ケンで酒を飲んでいたら。バカ話を肴に三人は大いに飲み、皆したたか酔っぱらった頃、それは始まった。「ハンスとケンの我慢大会！！」。「クルミをおでこで割る」という何の芸もない競争だった。手のひらに持ったクルミを勢い良く額にたたきつける。まずケンが割ると、ハンスも「ヨオーシ！」と割った。酔っていたせいか、まるで痛くなかった(気がした)。次々と割っていくうち、しまいにはお互いの額は皮がむけ血がにじみだしていた。それでも二人は大はしゃぎで割り続けていたそうだ(エミ談)。翌朝、二日酔いと額の激痛で二人は大いに後悔したそう。あんなバカとまた酒を飲みたいものだ。

小田 弘美 (パドラー)

ハンスは手合いの合間をみては奥多摩を訪れ、この地で多くの友達を作りました。そして「いつかここに古い日本の家を借りて住み、囲碁教室をやりたい」と熱く語っていました。

私たちは、私がカヌーの本場ドイツから来たハンスにカヌーを教え、ハンスが囲碁の本場である日本人の私に囲碁を教えるという、おかしな関係で、二人はそんな「東西文化の逆転現象」を、いつも笑って話のネタにしていました。プロの棋士であり、パドラーであり、自然を愛し、日本人よりも日本が好きで、曲がったことが嫌いで、嫌いな食べ物が全くなくて、体もデカイが、やることもデカかった。日本で暮らして13年。珈琲とエビスビールと裕子さんの手料理を愛したハンス。君の死は、囲碁界の損失だけでなく、日本にとっても大きな損失だよ。

ハンスよ、安らかに眠ってくれ。



奥多摩にて



2002年夏
ドイツにて

師匠 小林 千寿 （日本棋院 棋士）

1989年のウィーンのヨーロッパ囲碁選手権戦で「僕を覚えていますか？」と笑顔の長身の青年が話しかけてきました。それが、3年ぶりに再会したハンス君でした。それから、ずっと、そして今もハンス君は私の家族の一員です。盤上のこと、世界の囲碁のこと、音楽を聴いて、おいしいものをたくさん食べて……本当に多くの時間を過ごしましたね。今は、どんなに話しかけても、あの笑顔も声ももどってきません。でも、ハンス君が残した多くのことを私は心の中でハンス君と話し合いながら、これからも今までのように命ある限りつづけましょう。ハンス君本当にありがとう。

ブレーメン碁クラブの機関誌から

ドイツ時代の成績

ブレーメン碁クラブの機関誌“WindmuehleKi”(訳注:Windmuehleは「風車」、Kiは「棋」の意。ブレーメン地方は風が強く、風車が名物となっている。)に掲載されたハンス・ピーチさんのアマチュア時代(14級からプロを目指して日本に旅立つまで)のキャリアから、ハイライトを抜粋しました。(Stefan Hruschka)

84年9月号:

1984年7月14日、ブレーメンリーグの最終局が行われた。勝率部門では、ハンス・ピーチが、15勝5敗の勝率75%で逆転優勝。今シーズンの間に12級から8級に昇段した。

85年2月号:

-----ブレーメンの新星、ハンス・ピーチ3級。彼の棋力は爆発的に伸びており、シーズン後半では8連勝を飾った。

84/85シーズンの半ばで:

誰がハンス・ピーチを止めるのか?彼のリーグ戦での素晴らしい成績は、他の全てのプレイヤーの目標となっている。8連勝は新記録で、しかも内4局は初段を破っての勝利である。シーズン開幕当初14級だった彼の棋力は、いまや2級である。

85年5月号:

勝率100パーセントでハンス・ピーチがリード。

85年9月号:

勝率部門では、全てのプレイヤーが、ハンスの優勝を確信している。加えて、連勝部門でも、彼の12連勝が最多。

85年11月号:

ブレーメン名人のタイトルを4連勝で獲得した。最終局はショッキングな125手投了となった。

86年11月号:

ハンスがやった!ブレーメン名人戦の4年の歴史の中で、彼が始めて連覇を飾った。

-----87年に開かれる北ドイツリーグで、彼は、ブレーメンチームの主将を務めることとなる。

87年2月号:

今年始めに二段だったハンス・ピーチは、ブレーメン碁クラブで最速の四段昇段を果たした。1年間で105局を打ち、ブレーメン外の87局での勝率は60.9%だった。

87年6月号:

ドイツカップを19勝8敗で大きくリードしている。

87年9月号:

ブレーメン名人戦を連覇。10:45、多数の各国報道陣の前で、ハンス・ピーチが賞金1,000マルクの小切手を受け取った-----というのは、ジョークで、実際は報道陣も賞金も無かった。(現在スポンサー募集中)けれど、ハンスが名人戦を勝ったのは事実。

87年11月号:

ドイツカップには、ブレーメンから27人が参加。もっとも忙しかったのはハンスで、八つのトーナメントで30勝をあげた。(最多勝)

88年2月号:

1987年のブレーメンのベストプレイヤー、ハンス・ピーチ 四段(その実力は限りなく五段に近いが)の成績は、59勝30敗(勝率60.3%)で、ドイツカップでも優勝。

-----互戦でヨーロッパチャンピオンに勝った初めてのブレーメンのプレイヤーとなった。ロンドントーナメントでイギリスのマシュー・マクファティアン六段を破ったのだ。

-----Ajaya(2級)との10番碁を、この春に9勝1敗で終える。(中国ルールの子局の置碁で行われた。)(訳注:自由置碁)

88年9月号:

ヨーロッパ選手権に6位入賞し、ラジオプレーメンのインタビューを受けた。ハンブルグの新聞は、彼を紹介する記事を載せた。

-----プレーメン選手権に加え、プレーメン早碁選手権でも優勝。

89年2月号:

1988年のプレーメンのベストプレイヤー、ハンスの快進撃はますます続く。プレーメン外での勝率は77.5%で、ヨーロッパ選手権は6位。

88年のドイツチャンピオンとなった。

-----プレーメンに住む30人の中国人のうち、1/3は囲碁を打つ。

12月27日にハンス宅において、ドイツ中国親善碁会が催され、20人が参加した。

-----ドイツに、プレーメンから参加したプレイヤーの中で、九つのトーナメントに参加したハンスが最多対局。勝率73.3%はベストスコア。

“ハンスの5年間の記録(いったい誰が5年間で448局ものトーナメント対局をこなせるだろう?)”

1984年2月7日の晩、ハンスは初めて私たちの囲碁クラブを訪れた。はじめの二晩は、私が1路盤で一番手直りの試験碁を打った。ハンスの6子局から始めたが、彼はすべて中押しで三連勝し、3子の4局目で、私はかろうじて3目勝つことができた。14級を認定し、数日後には初めてのトーナメントに参加し、4勝1敗だった。

その後14ヶ月の間、一月に1級のペースで昇級を続け、1985年のハノーバーの大会で初段になった。初めの1年間に、“ドイツ碁マガジン”で、“プレーメンの秀策の生まれ変わり”として度々取り上げられたが、高段者達は、まともには取り合わなかった-----。

89年11月号:

10月にハンブルグに引越すとき、ハンスは、自分にはもう必要ないと、気前よく数冊の囲碁の本を置いていった。

90年3月号:

1988年のプレーメンのベストプレイヤーは、やはりハンス。けれどハンブルグに移ったため、これが最後の受賞となる。

-----“ハンス・ピーチの10年間”

彼が、この10年間で、もっともアクティブで成功したプレイヤーであることは、疑うべくも無い。

6年弱の間に89のトーナメントで、ちょうど500局を打った。369勝130敗1分で、勝率は73.9%だった。

90年11月号:

“ハンス 日本で囲碁修行”

9月21日、ドイツ人はじめての院生となるべく、ハンスは日本に向けて旅立った。いまや、小林千寿五段の助力で、千葉の日本棋院研修所で院生修行をしている。研修所では毎朝6時に起床し、院生最下位のDクラスで、リトル碁モンスター(とても強い子供たち)と、戦っている。

私達の「先生」が彼の原点を探る：ハンス・ピーチさんがドイツを訪問

4年間の日本での生活ののち、ハンス・ピーチさんが1週間の休暇を取りました。主にプレーメンの家族のもとを訪れましたが、彼の昔の囲碁仲間にも会いました。

ハンスさんはドイツ人唯一の院生で、彼の時間はたいへん限られています。彼は1年のほとんどを院生リーグ戦の対局に費やし、今年の「本選」（院生リーグ戦の最終トーナメントで、上位3名がプロの初段になる）終了後、次のリーグ戦が始まるまで1週間しかありませんでした。

DGOZ（「German Go Magazine」）のインタビューのため、貴重な時間をドイツで過ごすことに彼が同意したことは、私達にとって特別なことになりました。このインタビューは、ヨヘン・ファスベンデルさん、クリストフ・ゲーラッハさん、ヴィルヘルム・ランクさんによって行われました

ヨヘン：あなたの毎日の勉強の予定はどのようになっていますか。

ハンス：私にとって3回目の本選でしたが勝ち抜くことはできませんでした。その後私は、一番最初に行っていた勉強をもう一度やることにしました。自分が最も好きな棋士の対局の棋譜を100局記憶するのです。

ヨヘン：それは誰ですか。現代の棋士ですか。

ハンス：武宮正樹先生と小林覚先生です。小林先生には、昨年から指導対局や私の対局を解説していただいたりしてお世話になっています。

ヨヘン：武宮先生と小林先生は同じ棋風ですか。

ハンス：いいえ、二人の棋風は違います。

ヨヘン：「Lessons in the Fundamentals of Go」（故影山利郎七段の著書。西洋では有名な本）も見ますか。

ハンス：ええ、もちろん。それから、毎日2時間詰碁を勉強します。難し

問題よりも、やさしい問題を数多く解きます。詰碁のファイルを作り、それを使って、形を一目で理解する訓練をします。もちろん、難しい問題も解きます。

ヨヘン：勉強は「院生（研修）センター」で行うのですか。

ハンス：勉強方法は人によって違います。センターにはプロの先生がいません。

ヨヘン：院生師範の先生はどうですか。

ハンス：師範の先生は3人いて、そのうち1人が必ず、私達が対局をする時にその場にいます。しかし先生方は、私達がルールに沿って対局をしているか、私達が行儀良く対局しているかどうかを見ています。教壇に立って、私達に物事を教えるということはしません。以前に、趙治勲先生が1週間に3回センターに来て下さった時期がありましたが、先生はそれを続けることはできませんでした。

クリストフ：院生の勉強プログラムはだれが作るのですか。

ハンス：勉強プログラムというものはありません。私は、師匠である小林千寿先生のアドバイスを聞き、先生が薦めて下さることを実践しています。先生のアドバイスを聞かないで後悔したことが何度もあります。

ヨヘン：「100局分の棋譜を勉強しなさい」といったアドバイスですか。

ハンス：囲碁の技術に関するだけでなく、日常生活についてもアドバイスをいただきます。例えば家事についてもそうです。私が掃除や食器洗いなどをきちんとしていないと、彼女はすぐにそれを見つけました。そして、週末の対局は良くない結果になるだろうと考え、いつもその通りになりました。囲碁以外に日常生活の中で物事に集中することもまた重要なことです。すべての物事に集中し、目標に向かって行かなければなりません。（小林）覚先生も同じことを言いました。彼は、外へ食事に行く時でさえも目標があります。それは、「今日はたくさん話したい」とか「たくさん飲みたい」といった小さなことです。いつでも小さな目標があります。日常生活の過ごし方は、盤上に反映されるのです。

ヨヘン：自覚を持って日常生活を過ごすということは、禅の思想を思い起

こさせますね。次の質問です。4年前のインタビューで、「私は速く正確に読むことが弱いので、詰碁を多く勉強している」と言っていました、古典詰碁はすべて勉強したのですか。

ハンス：多くの問題は複数の本に出っていますが、基本的なものはほとんど勉強しました。

ヨヘン：あなたはこういうことも言っていました。「自分が負ける時はいつも同じ展開なのです。序盤と中盤の初めではわりと形勢が良いのですが、私は相手よりもかなり多くの時間が必要なのです。そして時間がなくなってくると、どうしたら良いかわからなくなって、負けてしまいます。」

ハンス：ええ。今でもそうです。人間は本当には変わりませんから。間違いのレベルを改善しようとすることはできますが、私の場合はこれからもずっとこのままかもしれません。

ヨヘン：頭の柔らかい若い子供達は...

ハンス：...私が彼らよりも読みが速くなることはあり得ません。もっと勉強するより方法はないでしょう。

クリストフ：あなたの強さは戦略的な部分にあるのでしょうか。

ハンス：若い子供達よりも私が強い部分というのは、おそらく序盤戦と一局の方向性を見出すところにあると思います。

ヨヘン：子供達はとても速いスピードで強くなっていきます。

ハンス：時には一晩で強くなることもあります。彼らの上達のスピードは信じられません。

ヨヘン：あなたは本選で最も強い3人を負かしましたが...

ハンス：ですが、常に新しい強敵が出てくるのです。

ヨヘン：あなたの好きな布石は何ですか。独自のスタイルはありますか。

ハンス：この3年間、黒番では三連星を、白番では二連星を打っています。武宮先生の碁をよく勉強しています。

クリストフ：いつも同じ布石を打つのですか。

ハンス：限られた短い時間で対局をして、そして勝たなければなりません。時間制限とは、1時間の持ち時間と、1分間の秒読みです。100局の棋

譜を覚えようとしたのは、布石をマスターするためです。そうすれば、中盤戦で時間を多く使うことができます。

クリストフ：対戦相手にあなたの対局を研究されると不利になりませんか。

ハンス：もちろん誰でも研究をして、それを実戦で生かそうとします。それが布石を勉強する理由です。相手がどこから反撃してくるかがわかり、その反撃に対応することもできます。私は1つの布石に限定しているので、慣れた局面では主導権を握ることができます。私には選択の余地はありません。才能のある人だけが何でもできるのです。私は、14歳でプロになった中国人棋士のことを思い出しました。彼は危険な手は全く打ちません。大人の棋風と言えると思います。

ヨヘン：どうして三連星を選んだのですか。

ハンス：もともと私は地を重視していましたが、三連星はスピードのある、大変攻撃的な戦略です。小林千寿先生も三連星を打ちます。

ヨヘン：あなた独自のスタイルというものはないのでしょか。

ハンス：本当に強い棋士だけが自分自身のスタイルを持っていると思います。私の場合、中盤戦で攻撃的な布石と全く関係のない地を取りに行くような手を打つことがあります。布石とその後のバランスが取れていないのです。調子の悪い時は特にそうです。

ヨヘン：本選で調子が良くないというのは、心理的な問題があるのでしょうか。

ハンス：千寿先生は、もし私が絶好調であれば、本来の力を発揮するだろうと言っています。今年、私は勉強が十分にできませんでした。自慢するわけではないのですが、私はプロの先生に勝ったこともあります。その時は、1局が持碁、もう1局が4目勝ち(先番コミなし)でした。

ヨヘン：院生の制度について質問します。もしリーグ戦の最初(12月)に成績が良くても最後に成績が悪かったら、自動的に本選に進むことはできないのですね。

ハンス：制度は変わりました。今年は最後の3ヶ月(5月・6月・7月)

の成績によって決められました。

ヨヘン：では12月にA1クラスにいたとしたら、何かいいことがあるのですか。

ハンス：何もありません。

クリストフ：対局で勝てないときは、とても失望していたでしょうね。

ハンス：ええ。とても怒っていました。でも怒っている時は私は勝てるのです。

クリストフ：では来年の7月ごろには、私たちはあなたを怒らせないといけませんね...

ヨヘン：ところでエミール（ニーフス）さんはどうですか。

ハンス：彼は院生リーグの一番下、Dクラスにいます。

クリストフ：彼は相当強くなりましたか。

ハンス：まだDクラスが一番下にいるので分からないかも知れませんが、彼は間違いなく強くなりました。ヨーロッパの二・三段くらいの力はあるでしょう。彼には今、キエフ出身で13歳の、ドミトリ・ボガツキー君というライバルがいます。

ヨヘン：ヨーロッパの院生はどのように資金を援助されているのですか。

ハンス：私の場合、両親が費用を送ってくれます。しかしドミトリ君は両親からの援助が受けられません。千寿先生がすべての費用を援助しています。ルーマニアのソリン君は、先生に仕事を見つけていただきました。彼は英語で囲碁を教えています。千寿先生は私たちみんなを支援して下さっています。私は安い費用で生活できます。エミール君は他の院生と一緒に研修センターに住んでいます。

ヨヘン：千寿さんは、生徒を選ぶ時に、言葉や食べ物の問題も含めて日本で生活できるかどうかを見ていると言っています。

ハンス：それに加えて、その人の性格が日本での生活に合うかどうかを確かめるのです。これが最も重要なことです。

ヨヘン：その他のことですが、レスゼック・ソルダンさん（ポーランド）のように食べ物に問題があったり、あるいは座ることに問題がある場合は

どうですか。

ハンス：座ることには慣れますよ。私はドイツにいる時でも同じように座っています。

ヨヘン：あなたと同じ実力の人の本選を勝ち抜くことができないというのは、西洋人にはチャンスがないことを意味するものではありませんか。1981年のマイケル・レドモンドさんが、本選を勝ち抜いてプロになった唯一の例です。その他のシュレンパーさん・ヴィンマーさんなどは、本選を打たなくてよかったですね。トロイ・アンダーソンさんはどうしましたか。

ハンス：彼は特別でした。しかしあまり強くはなりません。Dクラスから上がることができず、1年間しか日本にいませんでした。

ヨヘン：先程の質問に戻りますが、西洋人にはチャンスはあるのでしょうか。

ハンス：もちろんあります。若いうちに日本に来れば必ずチャンスはあります。エミール君は、しっかり勉強すれば大変強くなれます。持っている力を囲碁へ向けることができれば、レドモンド先生と同じくらい強くなる可能性があります。彼はまだ14歳です。この年齢では、囲碁以外にもあらゆることにおいて努力しなければなりません。ドミトリ君との競争もあります。

クリストフ：院生の間の競争はとても厳しいですか。

ハンス：ええ。これは遊び場ではありません。飢えた狼がたくさんいて、肉が3切れしかないというような状況です。本当の意味では親しくすることはできません。交流することはありますが、いつでも少し躊躇してしまいます。もちろん友達になることはできますが。

ヨヘン：彼らはインターナショナルスクールに通っているのですか。

ハンス：費用が高くて誰も通うことはできません。エミール君は日本の学校に通っています。

ヨヘン：今度があなたにとって5回目のプロへの挑戦となります。その後はどうしますか。

ハンス：プロになるか、それともならないか、ということだけです。結果

にかかわらず、院生最後の年にしようと決めました。

ヨヘン：でも日本に残るのですよね。

ハンス：そうするかもしれませんが、まだ決めていません。

ヨヘン：ヨーロッパでレッスンプロとして生活することは考えられますか。北米にはレッスンプロがいますし、ヨーロッパ囲碁文化センター（European Go Culture Center）であればその可能性もあると思いますが。

ハンス：そのことはまだ考えていません。私は来年プロになりたいです。もしそれが叶わなかったら、そこで進むべき道を考えようと思います。今そのことを考えたら、自分自身にプレッシャーを与えてしまって全く意味がありません。

ヴィルヘルム：もしプロになったらどうしますか。

ハンス：日本に残って対局をします。

ヴィルヘルム：プロになったら生活はどのようになりますか。対局はどのくらいあるのですか。決まった棋戦はあるのですか。

ハンス：プロになると「大手合」があります。大手合を対局すると、初段から九段まで昇段することができます。それから、7つの新聞棋戦を含めて年間に約10種類の棋戦があります。

ヴィルヘルム：対局で生計を立てられるのでしょうか。

ハンス：全ての対局に負けてしまうと...初段のうちは、あまり多くの収入を得ることはできません。五段になると、かなりの収入を得ることができます。どのプロもできるだけ早く五段に上がるよう頑張っています。

ヨヘン：全員が「大手合」を打つのですか。

ハンス：九段以外は全員です。

ヨヘン：昇段するにつれて、さらに厳しくなるのですね。小林千寿先生ですが、1972年に初段になり、1978年に五段昇段、その後はどうしたのでしょうか。

ハンス：ちょっと言いづらいことですね。先生は海外への普及指導をはじめ、対局のほかにも多くのことをしていますから。

ヨヘン：あなたがアマチュアの人と対局することが多いのを先生は気にし

いますか。あなたの技術に悪い影響を与えることはないのでしょうか。

ハンス：問題ないと思います。でも日本に戻ったら、慣れるまで少し時間がかかるでしょう。

ヴィルヘルム：何に慣れるということですか。

ハンス：ドイツにいる間は、一日中ドイツ語を話しています。戻ったら自分の碁のリズムを取り戻さなければなりません。

ヴィルヘルム：囲碁以外で、体調を維持するために何をしていますか。

ハンス：週に2・3回エアロビクスに行きます。

ヴィルヘルム：弓道などの、日本のスポーツもしますか。

ハンス：そういったことはしていません。本選の時は、朝に15分間黙想をしました。それと、研修センターに卓球台があります。そのくらいです。

ヨヘン：日本でフランク・ヤンセンさんとマシュー・マクファディアンさんに会いましたか。

ハンス：はい。彼らは本選開始の時に来日しました。日本に囲碁の指導方法を学びに来ました。囲碁の指導方法は、一度きりの研修で学ぶにはとても範囲の広い課題ですが、彼らは日本で有意義なことを多く学んだと思います。あまり批判的になるつもりはないのですが、ヨーロッパの囲碁に変化をもたらすためには、2人の指導者を日本へ派遣するだけでなく、さらに多くのことが必要でしょう。

クリストフ：あなたはどうやって囲碁を覚えたのですか。そしていつから囲碁を本格的に勉強するようになったのですか。

ハンス：はっきりとは思い出せないのですが、遊ぶことが好きだったので、ゲームには興味を持っていました。本格的に打つようになったのは1984年ですが、覚えたのは9歳か10歳の時で、親戚の人に教えてもらいました。友達のグレゴールがルールを知っていたので、学校で二人で打ちました。授業中は席が離れていたのですが、卓球の得点表示板のようなものを作り、「A-1」「D-15」というように互いに打つ場所を示しながら対局をしました。

ヨヘン：あなたが初めて囲碁クラブに来た時、すぐに9路盤で負かされた

ことを覚えています。その時「German Go Magazine」で、「ブレーメンに秀策の再来」と紹介しました。1986年に親善対局でステファン・ブディクさんに勝ってから、ドイツの有段者があなたに注目し始めました。

クリストフ：初段になるまでどのくらいかかりましたか。

ハンス：1年です。

ヨヘン：14ヶ月ですね。84年2月から85年4月にかけてです。毎月1級ずつ上がりました。それから半年で二段、1986年に四段、1988年に五段になりました。

クリストフ：どのようにして日本に行くことになったのですか。

ハンス：1990年、ウィーンで千寿先生にお会いして、その時先生が、チャンスがあるかもしれないと言ってくれました。私は、IBMトーナメントで日本へ行った時に、院生になるための手続きについて知りたかったのだと先生に話しました。当時日本に知り合いは誰もいませんでした。そしてロブ・ファン・ザイストさんから聞いた話が、私を落胆させたのです。彼は私に、「院生研修はとてもストレスが多く、そして自分は健康上の理由で院生を辞めた」と話しました。1988年のことです。

クリストフ：どうしてIBMトーナメントに参加することになったのですか。

ハンス：おかしな話なのですが、私は予選を通過したわけではないのです。ヨーロッパ代表が参加できるという連絡が、ヨーロッパ囲碁連盟に突然入ってきて、連盟のほうであわてて参加できる人を探したのです。

クリストフ：1990年には、状況はどのように変わっていたのですか。

ハンス：私自身、心境の変化があって、提案に対してよりオープンになりました。1988年、私はまだコミュニティーサービス（兵役の代わりに行う仕事）が残っていました。1990年、仕事は終わっていましたが、大学へ行きたいという気持ちがまだありませんでした。そこで、日本へ行くチャンスを得ることができたら、絶対に行こうと思いました。千寿先生のごことは、1986年にブダペストで初めて会って以来知っていたのですが、1998年に日本へ行った時は、先生が東京に住んでいることが全く

思い浮かびませんでした。ブダペストでフランク・ヤンセンさんと初めて対局した時のことを、私ははっきりと覚えています。対局はたった42手で終わりました。大斜定石で、私の石が死に、そこで私は1時間半も考えていました。対局後、先生に講評をお願いしました。棋力を聞かれたので「四段」と答えたら、先生は笑わずにはいられませんでした。

ヨヘン：院生になったのは何歳の時ですか。

ハンス：22歳です。その年齢なら他の人は名人になっていますね。

クリストフ：千寿先生がお世話を下さったのですが、先生とのつながりがなくても院生になることは可能でしょうか。

ハンス：いいえ。千寿先生のように英語が上手で、しかも囲碁の普及に積極的なプロ棋士の方は数えるほどしかいません。

クリストフ：もしあなたが日本でプロになったら、囲碁普及にどのように貢献できると思いますか。

ハンス：もし私が日本でプロになったら、多くの若い人たちが日本へ行って、同じことに挑戦しようとするでしょう。実際、彼らはもうすでに来ています。私が4年前に日本に来たから、彼らは後に続いて来ているのです。それが私の役割だと思います。私自身は、レドモンド先生のレベルには到達できないでしょう。もちろん、できる限りの努力はします。五段には昇段したいです。私のあと、エミール君のような人たちが、もっと若いうちから日本に来て、より高いレベルまで強くなるでしょう。

クリストフ：もし日本のプロがいれば、マスコミは囲碁に関心を示すようになるのではないのでしょうか。これまでの成績のことですが、1年目が最も成功した年だったのでしょくか。

ハンス：私は3回本選に参加しましたが、結果は毎回少しずつ悪くなりました。ですが、自分のことをスランプであるとか、弱くなっているとは考えていません。他の人たちが強くなっています。それと、ヨーロッパで最高レベルの打ち手として、確かな実力があるという自信を持って日本に来て、そのことは忘れなければなりません。もう一度初めから囲碁を勉強しなおさなければなりません。

クリストフ：ヨーロッパの囲碁の悪い点は何でしょうか。

ハンス：基本的な知識が欠けていると思います。夜と昼ほどの差があると思います。基本的な知識とは、自ら体得したことを表します。4～5歳で囲碁を始めると、手筋や詰碁を覚えます。それは物を食べたり飲んだりすることのように、自然なことになるのです。囲碁は、言葉で表現することがとても難しいです。ヨーロッパにいて私達が不利なこととして、囲碁を表現するのに適切な言葉が日本語しかないことが挙げられます。日本にいるほうが、囲碁を学ぶ機会をより多く得られるのです。大多数のプロ棋士は、特別な才能を持っているわけではありません。才能を持っているのはごくわずかの人がだけです。すべては研究の賜物です。

ヨヘン：あなたと千寿先生の理想は武宮先生ですね。

ハンス：武宮先生は、とても親しみやすい方です。

クリストフ：アマチュアの人たちは、棋力向上のためにどのようなことができるでしょうか。

ハンス：私の経験から言うと、棋譜を並べて覚えることはたいへん有効です。もちろん、あなたが上達のためにどれだけ熱心に勉強するかによりますが、「覚える」というのは、5分以内に150手まで並べられるようになることを意味します。脳の奥深い部分で、形に対する感覚を養うのです。

ヨヘン：他の棋士の対局の棋譜は並べるのですか。

ハンス：棋譜を速く並べるために、私は両手を使います。朝に3局、夜には10局の棋譜を並べます。最近は少しだけさぼっていましたが、また、最新のプロの対局棋譜はすべて並べています。基本的には記録係のついている対局です。

ヨヘン：記録係のつかない対局もあるのですか。

ハンス：はい。各棋戦の予選ラウンドはみんなそうです。皆さんが「囲碁年鑑」で見る棋譜は、言ってみれば「氷山の一角」にすぎません。プロの棋譜を並べる訓練は、時間がかかるのでアマチュアの方にはあまりお薦めできません。自分で打った碁を検討することも大切です。私の場合、本選の間は1週間に対局が2～3局あって、その間に先生に講評をいただいて

います。しかし、すべての院生が先生に講評をしてもらえるわけではありません。リーグ戦の時以外は、勉強したければ自分からアドバイスを求めに行かなければなりません。この点に関してプロの先生方は親切ですから、お願いすれば喜んで指導をして下さるでしょう。しかし、指導のお願いは自分自身でしなければなりません。その点では、私は千寿先生と覚先生に指導していただいているので、環境的に恵まれていると思います。

クリストフ：碁を打たない時は何をしていますか。あるいはそういう状況はないのでしょうか。

ハンス：碁の勉強をほとんどしない日は時々あります。ただ、そのような時でも、ヨーロッパの人たちとはほとんど連絡を取っていません。そのことについては気をつけなければなりません。彼らが悪いということではなくて、自分が囲碁に集中するためには良くないことなのです。ヨーロッパの人たちと会うことは、昔からの碁の仲間と会うことを意味します。私達は昔のことを語り合い、やがて感情がこみ上げてくるでしょう。でもそれは、今の私にとって何の役にも立ちません。囲碁の勉強に関係のないことをするのは例外です。結局、今はすべてが囲碁に関わることなのです。

ヨヘン：ディスコには行きませんか。

ハンス：行きません。

ヨヘン：音楽も聞きませんか。

ハンス：音楽は聞きます。

ヨヘン：ハンスさん、ありがとうございました。またドイツで会えることを楽しみにしています。

ハンス：プロになったら、大手合が4月に始まるまで半年ありますので、その時には必ずまた帰ってきます。

おわり

思い出の一局

第2回LG盃 世界棋王戦 1回戦

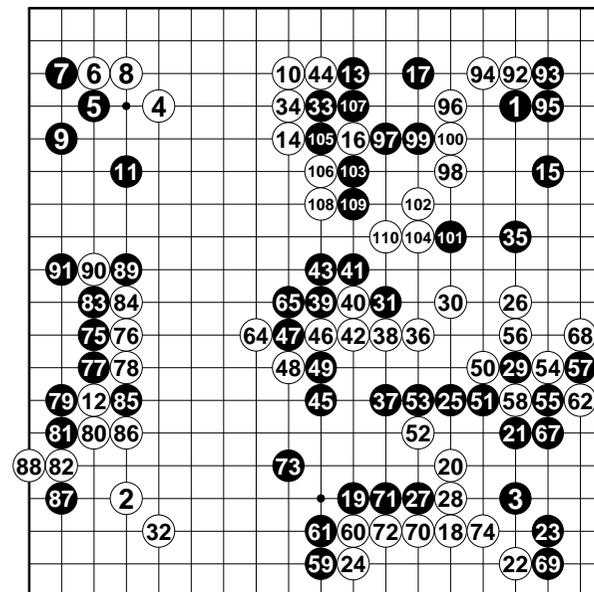
白 依田紀基 碁聖(当時)

黒 ハンス・ピーチ 初段(当時)

「これから皆さんにご紹介するのは第2回LG杯1回戦の依田紀基碁聖とハンス君との一戦。依田さんは彼の持っている力を、すべて引き出そうとしてくれました。彼もその期待に応えて、途中フラフラする場面もありましたが、最後はハンス君の半目勝ち。初段が碁聖に勝ったのですから、たいしたものですよ」～本文より～

(編注) 本ページは1997年発行の棋道誌8月号をもとに編集し直したものです。文中の解説者は小林覚九段によるものです。

第1譜(1~110)

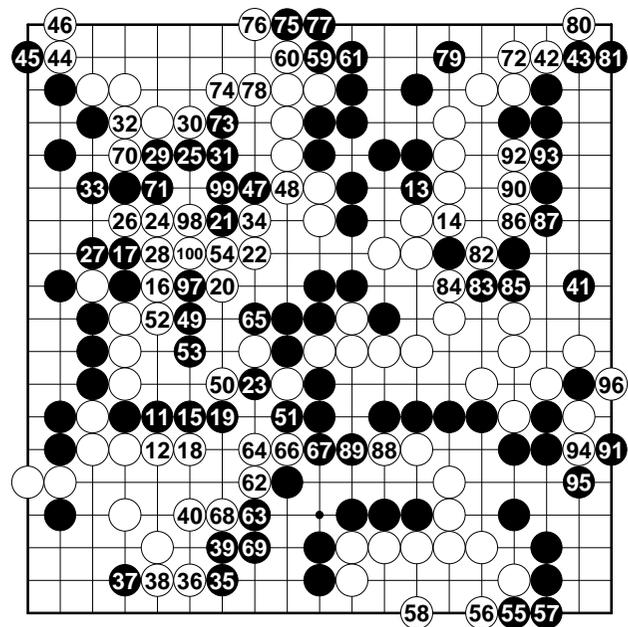


63 at 29, 66 at 58

(解説)

白12から16まで依田碁聖の“胸を貸そう”という雰囲気が出ているとのこと。17まで黒の有望な布石。黒25では56であった。黒31は“芯を作った”と好評の一手。黒45から封鎖されては明らかに黒ムード。しかし黒59が悪手でここは逆から(72の下)コウ材を求める所。白68となっては白が大いに盛り返した。

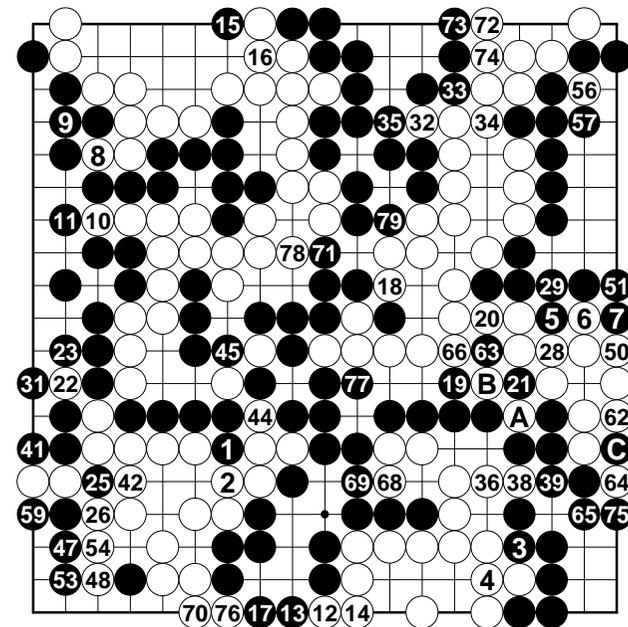
第2譜 (111 ~ 200)



(解説)

白 34 の時点で、黒は残された大場である下辺と右辺の両方に先着しなくてはコミが出せない形勢。黒 35 が苦心の一手。白の左下隅の味を睨んだ手。隅の手の有無は難解な読みが必要だが、黒は結果的に依田碁聖を相手に、黒 35、41 と二カ所の大場を打ったのは見事というよりない、との評を得た。その機会を引き出したのが黒 35 だった。

第3譜 (201 ~ 280)



61 at 21, 67 at B, 80 at C

280 手完、黒半目勝ち

(解説)

前譜で二カ所の大場に回れた黒は、その後、細かいヨセ合いが続くなか、僅かに半目残した。初段、しかも欧州出身の棋士が世界戦でタイトル者を倒したのは、前代未聞の快挙だった。

編集 偲ぶ会実行委員会

発行日 2003.6.14

実行委員長 加藤 正夫

実行委員 梅木 英

太田万三彦

太田磨草子

大谷 裕子

岡本 隆之

小田 弘美

前田 博明

オブザーバー 小林 覚

小林 千寿